

パンパンパンパンツツ♡♡♡ゴリュゴリュ♡♡♡

「あ♡♡♡らめらめらめええ♡♡♡やだっ、おく♡♡♡こわれちゃうからあ♡♡♡ッ♡♡♡」

視界が白く明滅する。百九十センチの巨体に背後から完全に組み敷かれ、逃げ場のない体勢で最奥を暴力的にかき回されている。

「すみません……お嬢様の中……すぐきつくて……止まらないです……っ」

耳元に降ってくるのは、いつものオドオドとした、申し訳なさそうな声。

なのに、私の腰をがっちりと掴んで凶悪な巨根を打ち付けてくる分厚い手は、絶対に私を逃がしてくれない。

ドチュドチュドチュン♡♡♡♡♡

「んあ♡♡♡ひあ♡♡♡おほおほ♡♡♡ッ♡♡♡」

——涙と涎でぐちゃぐちゃになった顔で、絶頂の波に飲まれながら私はぼんやりと考えていた。

（なんで……なんで、私、こんなことになっているの……？）

こいつは、ただ図体がデカいだけの、何の役にも立たないポンコツ執事のはずなのに。私が冗談で命じた「証明」は、私がこんな風に何度も何度もイカされて、頭がおかしくなるまで犯され続けるようなものじゃなかったはずなのに——

ガシャンッ！

本日三度目の破壊音に、私は盛大に天を仰いだ。

「も、申し訳ありません、お嬢様……っ！」

悲鳴のような謝罪と共に、大男が床に這いつくばって陶片を拾い集めている。今日の犠牲者は、母のお気に入りだったティーカップだ。

彼の名前はカイ。うちの屋敷で雇っている執事だ。百九十センチという見上げるほどの長身で、無駄に顔だけはいい。黒髪を後ろに流した伏し目がちな横顔は、悔しいけれどため息が出るほど絵画のように整っている。

——中身さえ伴っていればの話だけれど。

「……あんなねえ……今月だけで何枚割ったわけ？」

「さ、三枚……かと……」

「五枚よ！」

「……ご、五枚……」

しゅん、と大きな体が縮こまる。大型犬が叱られているみたいだった。  
「あんた自分の給金いくら知ってるの？」

「え……は、はい」

「それ全部使っても足りないからね。あんたが割った食器の総額」

カイの顔がさらに青ざめた。大きな手の中で、陶片がカチカチ鳴っている。こんな大きな身体しているくせに、震えているのだ。

（——ちよっとかわいそうかな）

そう思いはしたけれど、口には出さない。甘やかすとこの男は同じことを繰り返す。

「あんたほんつとに、図体ばかりデカくって、一体何の役に立てるわけ？」

カイは何も言い返さない。いつものことだ。

(……まったく、ほんと気弱なんだから)

ハンサムな顔立ちで、うちに来た当初は侍女たちが色めき立っていた。一週間で全員が興味を失ったけど。口を開けば「すみません」、手を動かせば何かが割れる。せっかくのイケメンも、全部あの中身のせいで台無しになっている。ここまでくると、もったいないを通り越して腹が立つてくる。

なぜ父がこの男を雇ったのか。「行き場がなかった」という理由だけで拾ってくるのが、うちの父親の性分だった。その優しさの尻拭いは全部私に回ってくる。

そんな男と、今夜から三日間、屋敷で二人きりになる。父が急な商用で王都に発つことになり、使用人も全員連れて行ったからだ。

(……残されたのはこの役立たずだけ。まあ、王都で破壊活動されちゃ堪んないものね)

「——三日間、何も壊さないでよ」

「が、頑張ります」

その頑張りが実を結んだことはこれまで一度だってなかったのだが

二日間は何とかやり過ぎた。カイを庭仕事と馬の世話に回して、屋敷の中での接点を最小限にした。触らせなければ壊れないし、私自身身の回りのことくらいはできる。消去法の適材適所だ。

三日目——父が帰るのは今日の深夜だが、もう少し辛抱だった。

けれど、昼食の片付けの時にそれは起きた。カイが食器を運ぶ途中でつまずいて——今度は皿ではなく、私の頭上にスープの残りをひっくり

返したのだ。

「……っ」

冷たくなったスプーンが髪を伝って、肩に、胸元に、じわりと染みていく。

「お、お嬢様……っ！ す、すみませんすみませんすみません——」

「…………」

「だ、大丈夫ですか！？ 怪我は——」

「……………カイ」

「は、はいっ」

「三日間何も問題起こすなって言ったわよね。しかも主人にスプーンぶっかけるって、あんた本当に救いようがないわね！？」

カイの顔が、目に見えて辛そうに歪んだ。

「着替えてくるわ。サロンで待ってなさい。——逃げたらクビにするか

ら」

言い残して、背を向けた。ちよつと言い過ぎたかなとは思ったけれど、今回ばかりは撤回する気はなかった。

自室で着替えて、髪を拭いて、サロンに向かった。

カイがソファの前に直立不動で立っていた。処刑を待つ囚人みたいな真っ青な顔をしている。

(……そのしよげた顔がまた腹立つのよ)

ソファに腰を下ろした。脚を組んで、カイを見上げる。叱る時はいつもこうする。座っている私に対して立たせることで、カイの方が居心地が悪くなる。百九十センチの大男が、座っている小娘に萎縮しているのがどこか滑稽だった。

「……今月の損害、ちゃんと覚えてる？ カップ五枚、花瓶一個、絨毯の染み五箇所、庭の花壇の苗が四株、あと今日の私の服。合計でいくら



だと思う？」

「……………」

「あなたの給金半年分じゃ足りないわよ」

「……す、すみません……」

「世の中謝罪だけじゃ済まないこともあるのよ。——ねえカイ。あんた  
ってほんつとに何の取り柄もないわよね」

「……はい」

「食器は割る。花は枯らす。主人にはスープをぶちまける。ただデカイ  
だけで何の役にも立たない。あんたが来てから私の仕事、倍に増えてる  
の」

カイはうつむいたまま黙っていた。大きな体を縮こまらせて、両手を  
ぎゅっと握っている。

——普段ならここで終わる。言い過ぎたかな、とほんの少しだけ罪悪

感を覚えて、「もう下がっていいわ」で締めくくる。

でもこの日は、スープをかぶった不快感と、お気に入りドレスを台無しにされた苛立ちがどうしても収まらなかった。

更には、目の前で子犬のように萎縮している大男を見ると、無性に、もっと惨めな顔にさせてやりたいという意地悪な衝動が湧き上がってくる。

「……ほんと、ガサツよね。ティーカップ一つ満足に扱えないんだから、女性のエスコートなんて夢のまた夢だわ」

「……申し訳、ありません」

「うちの侍女たちも呆れてたわよ。顔はいいけど中身が残念すぎるって。あんたみたいなどんくさい男、どうせ女の扱い方も知らないんでしょ」

「……え」

「女の子と手すら繋いだことないんじゃない？——どうせ、童貞なん

でしょ」

言ってしまったから、あ……と思った。明らかに言い過ぎだった。

私の酷い言葉に、カイのうつむいていた顔が、ゆっくりと上がった。

「……ど、童貞じゃないです」

小さいけど、はっきりした声だった。

「……はあ？」

「童貞じゃ、ないです」

オドオドは残っている。残っているけど——その目はしっかりと私を見据えていた。

「嘘つくんじゃないわよ」

「嘘じゃないです」

「あんたみたいなの？ 寝言は寝て言いなさいよ」

「……俺みたいなのですけど、嘘じゃないです」

頬が少し赤くなっていた。恥ずかしいのだろう。こいつがこんなに真っ直ぐこっちを見るのは初めてだった。

（——な、なによ、その目。いつもは碌に目も合わさなくせに）  
苛立ちの中に、一瞬、別の感情が混ざったような気がしたけれど、すぐに蓋をした。

「じゃあ証明してみなさいよ」

そんなこと言うつもりなんてなかったのに。この愚図で図体だけデカイ男が女性経験があるということに、どこか苛立ちのような感情を覚えていたせいかもしれない。無性に嘘だと証明したくなった。

「え……でも、どうやって……」

「色々あるでしょ？」

「色々……」

カイが口を閉ざした。眉を深く寄せ、ひどく真剣な顔で考え込んでい

る。

その顔には、いつものオドオドした余裕のなさは微塵もなかった。

（——ちよっと待って。こいつ、ほんとに……童貞じゃないの？）

あんなにどんくさくて、気の利いたエスコートなんて絶対にできなそうなのに。でも、さっき私を真っ直ぐに見据えたあの目は、どうしても嘘をついているようには見えなかった。

じゃあ、こいつは過去に女と、そういうことをした経験があるというの？

急に得体の知れない焦りが込み上げてきた。呆れて笑い飛ばしてやるはずだったのに、なぜか喉が引きつって声が出ない。

数秒の沈黙の後。カイが、私に向かって一歩近づいた。

「は？ 何——」

肩を押された。

ぽふつとソファの背もたれに体が沈む。カイの手が肩を押さえていた。長身に違わぬ大きな手だった。片手で肩が全部覆われている。

「——しょ、証明しようかと」

いつものオドオドした声なのに、肩を押さえつける手の力は強い。

（……え。は？なに……この状況？押し倒されてる？私が？このポ  
ンコツに？）

カイの顔が近かった。さっきまでオドオドしていた目が、至近距離でこっちを見ている。その耳は真っ赤に染まっているのに、私を見下ろす目はどこかギラギラとしている。

「あの、お嬢様」

「何」

「じっとしてもらえると、助かります」

「は……？」

スカートの裾に手がかかった。

「——っ!？」

大きな手が太もものに触れた。指先が内側を滑って、スカートをたくし上げていく。

「ちょ、ちょっと待ちなさ——」

「すみません。でも、お嬢様が証明しろって……」

「い、言っただけ! 言っただけこういう意味じゃ——」

「……こういう意味じゃないんですか？」

「……………っ」

真顔で、ひどく静かに聞き返された。

(冗談に決まってるじゃない……! ただ、あんたが困って泣きそうな顔をするのを見たかっただけで……っ)

ふざけないでと怒鳴りつけようとした。——けれど、声が出ない。

至近距離で見下ろしてくるカイの目が、異常なほど据わっていたからだ。いつものオドオドした気弱な態度はどこにもない。私を逃がすまいと見据えるその暗い瞳は、間違いなく「雄」のそれだった。

逃げ道を塞ぐように立ちはだかる百九十センチの巨体と、圧倒的な力の差に、本能的な恐怖すら覚えて体がすくむ。

スカートが腰まで捲り上げられた。下着が見えている。冗談じゃない。こんな——いつも見下している使えないポンコツ使用人に、肌を晒すなんて。

逃げなければ。そう分かっているのに体が動かない。カイの大きな手が太ももを押さえていて、この異様な事態に私の思考はぐちゃぐちゃになっ

ていた。  
カイがソファの前に膝をついた。両膝の間に大きな体が割り込んでくる。脚を閉じようとしたけど、肩幅が広すぎて物理的に無理だった。



「な、何する気――」

返事はなかった。

カイの顔が、太ももの間に降りてきた。

下着越しに、息がかかった。

「っ――」

「……すみません。このまま、失礼します」

謝罪の言葉とは裏腹に、下着をずらす手つきには一切の躊躇いがなかった。指先がふちに引っかけ、無造作に横へスライドさせられる。守るものを失った秘部に空気が直接触れ、羞恥と恐怖で反射的に腰が跳ねた。

だが、逃げることは許されなかった。カイの分厚い両手が私の腰を両側から掴み、がっちり固定する。

（え……うそ……まさか、嘘でしょ……!?!）

視界の端で、カイの顔が私の股間へと沈んでいくのが見えた。

むき出しの秘部に、熱い吐息が直接吹きかかる。

（うそ、まさか——）

レロォ……♡

「んんっ……!!？」

熱く、分厚い肉塊が、私のデリケートな割れ目を下から上へとねつとり舐め上げた。

ビクンツと背筋を強烈な電流が駆け抜ける。ただ表面を撫でられただけではない。極太の舌がひだの隙間にぐっと押し当てられ、そこからじんわりと蜜を絡め取りながら這い上がってくる、ひどく卑猥で生々しい感触だった。

（は、え、ちょっと、なんで……こんな男に、舐められ——っ）

「……お嬢様」

私の太ももの間に顔を埋めたまま、カイが見上げてきた。いつものオドオドした顔。けれど、その形の良い唇は、私の秘部から溢れ出した愛液でてらてらと卑猥に光っていた。

「……お嬢様のここ……すごく、濡れています。——甘い……雌の匂いがある」

「っ——黙りなさい……!」

「すみません。でも——」

もう一度、大きな舌が柔らかな肉に押し当てられた。

レロレロオ……♡チュルル……♡♡

「んっ……♡あ……あっ♡」

声を出してはいけない。こんな使えない男に舐められて、感じているみたいな声なんて。必死に唇を噛んで堪えるのに、一舐めされるごとにお腹の奥がきゅんきゅんと甘く疼いてしまう。

チュパ……チュパッ♡レロレロオ……♡♡

「ふあ……っ♡んっ……や、そこ……だめっ……♡♡」

きつく閉じていた柔らかかなひだを、極太の舌で強引にこじ開けてくる。露わになった内側の敏感な粘膜をねっとりとし舐め上げ、そのままめくれただひだの肉を分厚い唇で乱暴に挟み込んで、ずぞぞ……と音を立てて啜り上げた。

「お嬢様のここ、すごく柔らかい。ふるふるしてます」

「実況っ、しなくていいって……ばっ♡」

「すみません」

言葉では謝るくせに、舐め回す舌は全く止まらない。むしろ勢いを増していく。

チュパチュパ♡♡ジュルル♡♡♡

「んん……!?!♡やっ……あっ……♡♡♡」

太ももを閉じようとしたが、カイの太い腕と肩幅が邪魔でミリ単位も動かせない。ならばと腰を引こうとしても、大きな手が私の腰を掴んだまま絶対に逃がしてくれない。百九十センチの大男に下半身を完全に口ツクされ、私はまな板の上の鯉みたいなものだった。

「あの、動かないでもらえると——」

「動くなつて言うならっ、離しなさいよ……!?!?♡♡」

「それは……無理です」

「な、なんでっ！」

「……やめたくないの」

「………は？」

カイの目がこつちを見上げていた。耳は相変わらず真っ赤に染まっている。でも——「やめたくない」と呟いた時だけ、その声には一切の揺らぎがなかった。

思考をまとめる暇など与えられなかった。一番感じやすい場所——クリトリスを、舌の腹でべろりと舐め上げられたからだ。

ベロベロ♡♡デュルル♡♡♡

「ひあっ！？♡♡」

快感で腰が大きく跳ねた。だが、カイの手がそれを容赦なくソファへと押さえつける。

「あ……ここ、クリ……？ 反応すごいですね。ちょっと舐めただけでびくって震えました」

「や、やめなさ——ぐんっ！？♡♡」

カイの長い指先が、皮を器用に押し上げた。むき出しになった敏感な突起に、唾液で濡れた舌先がちょん、と意地悪に触れる。

チロチロオ……♡♡♡

「……ひっ！？♡♡」

声にならない悲鳴が上がり、背中がびくんと反り返った。

「……あ、すみません。痛かったですか？」

「い、痛くは……ない、けど」

「じゃあ、続けますね」

続けるな——と怒鳴りつけるはずだった。けれど口が開いた時にはもう、カイの分厚い唇がクリトリスを根元からすっぽりと咥え込んでいた。  
ズゾゾ……チロチロチロ♡♡デユデユ♡♡♡♡♡

「あっ♡んあっ……♡♡それえ……ひいあおおああ〜！♡♡♡♡♡」  
むき出しになった突起を、ざらついた舌先で高速で転がし、唇で挟み、強く吸い上げる。

執拗な愛撫に、お腹の奥が、きゅうう……と熱く縮み上がる。

「ちよっ……カイ……も、だめっ……♡♡♡♡♡」

「はい」

「なんか……変なお……♡♡」

「……変？」

「なが……熱い……♡♡♡」

耐えきれずに弱音を吐いた瞬間、さらに強く吸い上げられた。

ヂュウウウツ♡♡♡

「ひあっ！！♡♡やらやらあ！！♡♡それやらああ……♡♡♡」

（まずいわ……まずいまずい。こんな、こんなポンコツ相手に、

私、イカされ——）

カイの舌による責めは止まらない。強く吸い上げながら、片手が太ももの固定から離れ、ぬるりと入り口に触れた。彼自身の唾液と私の蜜をたっぷり絡めた長い指先が、ゆっくりと、しかし確実に私の中へと侵入してくる。

ヌププ……♡♡グチュ……♡♡♡



「あっ……♡♡ゆ、指……はいっ……♡♡」

「中指一本だけ……入れますね」

「入れてから言うな……ばかぁ!!♡♡」

「あ、すみません。もう入ってます」

カイの中指は、恐ろしいほど長くて太かった。中に入ってきた異物が、  
ところとろに蕩けた肉の壁をゆっくりと撫で回す。そして、お腹側のざら  
りとした場所に指の腹がぐっと押し当てられた瞬間、脳天を突き抜ける  
ような快感に腰がびくんと宙に浮いた。

「ほおお……!!?!♡♡」

「——ここ、ですか」

「……!?!♡♡」

「ここ、押すと中がぎゅって俺の指を締め付けてきますね」

グリ♡♡グリグリ♡♡♡♡